断章
旭川のアイヌ語地名研究
177
高橋 基

―十勝岳連峰のアイヌ語地名②―

前回は十勝岳連峰の秀峰オプタテシケ山(二〇二二・七メル)の伝説を紹介した。今回は下の写真の「ベベツ岳」から「前富良野岳」までの山を見ていこう。

北海道の山岳名は、各河川の水源が山岳名になっている例が多い。河川名がアイヌ語地名の例が多いので、山岳名も当然アイヌ語地名起源となる。「ベベツ岳」は、カタカナ表記の山岳名であるので、当然、アイヌ語地名起源の山岳名と判断できるが、「ベベツ川」の水源ではない。「ベベツ川」は、「美瑛川」の支流の川名である。

「ベベツ川」は、知里真志保(ちりましほ)の「上川郡アイヌ語地名解」では、「美瑛川」の支流の川名で、「ペペッ(pe-pet 水・川)―水量豊かで流れの早い川の義だという。」と地名解されている。また、読み方が特殊なので、地名解の最後に、「辺別川(ベベつがわ)」と読み方も追記している。なお、知里真志保は、「辺別川筋のアイヌ語地名」として、十個のアイヌ語地名解も書いている。その中で、狩猟に関する地名が二つあるので、ここで紹介しておきたい。

①クーテクンペッ(kutek-un-pet 仕掛弓の垣・ある・川)―柵を設けて仕掛弓をしかけ、熊や鹿を取る施設を「クーテク(ku-tek弓・手)」という。辺別川(上流に向かって)右岸の枝川。

②ヨコウシ(yoko-us-i 狙い撃ちし・つけている・所)―いつもそこで鹿を待ち伏せて、狙い射った所の義。右、枝川。

さて、十勝岳連峰の盟主の「十勝岳」のアイヌ語名を、十勝側では「ケンルニ」と呼称しているというが、語義は不明である。

また、「上ホロカメットク山」は、アイヌ語地名研究会の事務局長の渡辺隆の『山の履歴簿(第二巻)』によると、「ペナクシ・ホル・カ・メトッ・ヌプリ」―十勝川と空知川本流の川上にある・後戻り川の・峰(十勝連峰)の端(深山)の・山」であるという。

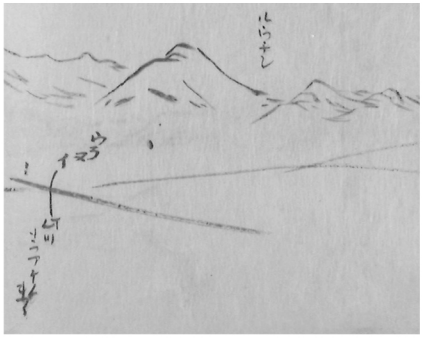
医療センターから見た十勝岳連峰

今回は、当連載を次回で終了することになったので、左上の十勝岳連峰の写真を見ながら、十勝岳連峰の思い出を書かせていただく。

十勝岳の思い出の最初は、高校時代に兄に連れられて、春山スキーに通ったことである。美瑛町白金温泉の望岳台からシールを着けて登り、下りは沢沿いに下った懐かしい思い出がある。

次は、音威子府高校地名調査部で、十勝側から十勝岳に登り、その後、改めて屈足(くつたり)から三泊四日で、河口の大津までゴムボート二隻で下ったこと。これで、北海道の三大河川、すなわち、石狩川・天塩川・十勝川の川下りを達成した。

三つ目は、安政五年(一八五八年)に、松浦武郎が、旭川から美瑛・上富良野を通り、写真の富良野岳と前富良野岳の間のルウチシ(ru-cis峠、山の鞍部)を越えて十勝の国へ山越えした。そのルウチシを確認するために、夫婦で富良野岳に登り、松浦武四郎が山越えしたルウチシを視認したことである。


松浦武四郎「ルウチシ」図

写真は、松浦武四郎が山越えに持参した野帳(のちょう)(携帯用手帳)の「ルウチシ」のスケッチである。この写真は、松浦武四郎の子孫の松浦一雄氏蔵、「国文学研究資料館史料館」(東京都)寄託のものを撮影したもの。現在は、三重県松坂市小野江町の「松浦武四郎記念館」所蔵である。(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します